

ドキュメント・ウォールによる出来事の視覚化とその活用

Documentation Wall : A visualization of events and the application

原田泰*¹
Harada Yasushi

*¹ 千葉工業大学
Chiba Institute of Technology

Workshop has been playing an important role as a place for people's expressive activities. As a way of documenting workshop, we propose Documentation Wall (DW): a wall of the workshop space on which we draw graphics or take photos to document what is happening in the workshop. DW is useful and effective as a documenting tool to give the participants immediate feedback or instant reflections of what is happening in the workshop. Also it is effective as a medium to report and explain the workshop activities to the people outside of the workshop. The DW is currently taking a form of analog representation (i.e. hand drawing and sketching), but in the future we would like to develop a digital version of DW. Digitalization will provide more opportunities to share the workshop activities immediately with wider range of people in the society and it will expand the potential use of the DW to apply for other new types of activities.

1. はじめに

市民の表現活動の場として、ワークショップ(以下 WS)は重要な役割を果たしている。WS などにおける活動内容をその進行とともに会場の壁に図として描いていく表現メディアを、ドキュメント・ウォール(Documentation Wall、以下 DW)と名付けた。また DW の表現者を仮にエディターと呼んでいる。

本稿では、DW のデジタル化に向けたデザインプロセスのうち、アナログ DW の考察から DW の特徴とポテンシャルを確認したワークショップの内容と結果を報告する。

2. ドキュメント・ウォールの現状

DW は活動の過程をその場で記録・表現し、主催者や参加者に活動の過程をフィードバックすることができる。また、活動空間の演出効果も大きく、さらに周囲の人々への説明や WS への勧誘の道具としても有効である。



図1 WSスペースの例:左の壁にDWを設置

完成した DW は、WS の内容と関連づけると、以下の 3 つの機能をもつ表現物ととらえることもできる。

- 出来事の地図(記録資料へのインタフェース)
- 物語の展開(時間軸、空間軸による視覚化)
- 出来事の構造(プログラム構造の視覚化)

現在は手描きのアナログ表現であるが、今後デジタル化することで、活動の社会化(共有)や新たな活動への応用の可能性が高まると考えている。複数の DW が蓄積されていけば、出来事と出来事のリンクが可能になり更なる利活用も可能となる。

3. DW の可能性を探るワークショップの実施

これまで WS 終了とともに役目を終わらせていた DW を関係者で改めて見直すことで、その再活用やツール化の可能性を見出すために DW ワークショップ(以下 DW-WS)を実施した。

3.1 ワークショップの概要

DW-WS は「主催者視点で DW 活用のヒントを探る」と題して、これまで行った表現活動実践で制作されたドキュメント・ウォール(DW)を WS 形式で分析した。その目的は DW の中に潜んでいる普遍的な構造を抽象概念として見つけ出す事である。

参加メンバーは 12 名、その内訳は下記のようになる。

- WS 運営スタッフ 4 名(内 1 名が 2009DW を担当)
- WS 記録担当スタッフ 4 名(内 1 名が 2008DW を担当)
- 対象とした WS に参加していない者 4 名

対象とした DW は 2007 年 7 月に実施した「未来館でみつける未来」WS(会場:日本科学未来館、対象:小学 6 年生)と、2009 年 11 月の「科学の体験を描いてみよう! 2」WS(会場:日本科学未来館、対象:不特定来場者)での DW である。いずれも、手描きのスケッチ作品制作と Zuzie というデジタルツールを組み合わせた表現ワークショップであるが、前者は 2 日間にわたる授業プログラムで、後者は 1 日で収めるコンパクトな WS とトークセッションを組み合わせたものであった。

3.2 ワークショップのプログラム

以下の流れで、ワークショップは実施された。

(1)DW についての解説:参加メンバーには WS での DW の利用を経験していないものもいるため、DW の意図、表現、活用について簡単に解説。

(2)ふたつの DW の概要を制作者が説明。それを受けて参加メンバーは二つの DW を見比べて、気がついたことを書き出し、参加メンバーで共有。

(3)DW の中で気になる部分を各自がデジタルカメラで撮影、プリントアウトしたシートにその部分を切り取った意図を説明。

(4)各シートの内容を発表し、共有。

(5)KJ 法によりシートの内容を構造化、メンバーの発見の全体像を図化。

(6) Zuzie ツールを利用して、グループ作品を制作。



図2 ワークショップの様子

4. ワークショップから浮かび上がった構造

図3は、KJ法で導き出されたキーワードを一つの図にまとめたものである。

DW から切りとられた様々な「気づき」を構造化してみると、そこにはワークショップをデザインする上で考慮すべき項目が浮かび上がった。参加者のために準備すべき項目、スタッフの活動やそれを支えるコンセプト、準備から実施・記録までのプロセス、必要なツール・資料、ドキュメンテーションの視点など、WS を実施するための視点やデザイン要素、必要なツールを読みとることができたということである。これは実施したWSの活動記録であると共に、次のWS実施に向けた「ガイドライン」と捉えることもできる。



図3 DW から読みとられた Zuzie 表現ワークショップの構造

視点を変えて、DW に何が描かれていたかを構造化すると、別の図を描くことができる(図4)。

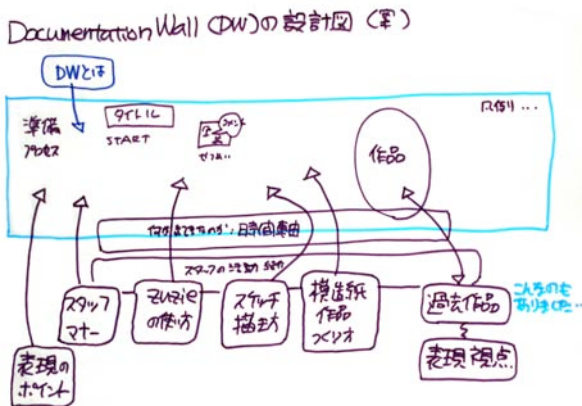


図4 DW の設計図(描かれているもの)

ワークショップのプログラム内容だけでなく、スタッフの振る舞いやツールの紹介、過去の WS 情報や会場設営の手順など、

できごとの何を記録すればよいのか、その手がかりを図として描くことができた。これは、図1のようなノウハウ (Knowing How) を導き出すための DW の表現方法と考えることができる。

参加メンバーそれぞれが DW から切りとった様々な画像から数点を選び、グループに分かれて制作した Zuzie 作品の例が図3である。これらからは、DW の表現要素が「せりふ」「コメント」「記録(写真)」「説明」に分類できるというだけでなく、WS ノウハウには「伝え易さ」「知識的なものと実践的なもの」があるということ、記録内容が「作品」「WS の構造(プログラムやその説明)」「参加者のやり取り」「表現活動」といった階層構造を持って描かれている、という気づきを得ることができた。



図5 Zuzie 作品として表現された DW の気づき

5. まとめ

DW はその場の出来事を映し出す表現なので、WS ごとに全く違うものができ上がる。また DW のエディターは、その時その場の出来事に反応して表現を行うので、あらかじめどのような DW ができ上がるかを完全にコントロールしている訳ではない。さらに DW を描くエディターのスキルや視点の違いも影響する。しかしこれらは表現方法の違いであり、本質的なコンテンツとして DW に描かれる内容には何らかのパターンが存在するはずである。今回、WS という方法で DW の内容を振り返ることによって、DW に何が描かれているのか、DW から何を読み取れるか、という議論を深めることができた。現時点の分析結果として、DW にはノウハウ (Knowing How) に関する知識や技術の情報がまとめられていると考えられる。

6. 今後の課題として

次の Zuzie ワークショップで今回えられた様々な視点や表現のポイントを、改めて利用してみることで、ツール化に向けたコンセプトや開発の方向性が絞り込まれるはずである。また、DW を支援/活用するデジタルツール開発に向けて、今回の結果を踏まえたデザインプロジェクトを計画している。

※本研究の一部は(独)科学技術振興機構、戦略的創造研究推進事業(CREST)の支援を受けている。

参考文献

[原田 2008] 原田泰、上田信行: 経験の現像所: 出来事の記録、記述、共有への情報デザインのアプローチ, デザイン学研究. 研究発表大会概要集 (55), p138-139, 日本デザイン学会, 2008.
 [原田 2009] 原田泰, 須永剛司: ドキュメンテーション・ウォールによる出来事の視覚化—主催者、参加者、見学者を結びつける機能をめざした出来事の記述と活用に向けて, デザイン学研究. 研究発表大会概要集 (56), p70-71, 日本デザイン学会, 2009.